

六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りづか
chairman Yamada Rokko
secondary c. and the
editor in chief Kotari
cover designed by little bird

3月号

たん
丹

山田六甲

涅槃寺

に る す を に な せ う ど
虹にじ 留 播すり を 西 鳴 背 渦 団どん
生あ 守 鉢ぼち 遠おち 風 き 丈 潮 栗ぐり
る 電 に 近こち の ながら より 落 覆おほ
る 雛 の 野 焼 の 高く 葎よし 焼やき は 尽 小
雪 の 焼 の 土 手 の 漁あさ り を 春 屑くず 若わか
残 れ る 嶺みね の 上 鴨 布め
の 上 鴨 布め

も 纏もちれつつ野焼の炎広ごりぬ
し 垂しづり雪孟もう宗そう竹たけの跳はね返る
ん 運河あり立春の湯気立ちこめて
け 裘けごろもに春しゅん雪せつの玉しづくかな
ん 運悪あしや海の苔り搔かきに雨激しうて
の 野良犬の吾を避けゆき梅探さぐり
い 石いし鎚づ山ちを仰げる雨の涅槃かな
の 海苔搔きの鼻水腕で拭ぬぐひけり
ち 地下足袋を春の泥からひき抜きぬ
が 崖を吹く風に落ち来る寒椿

春の宵

ど 土管より出す手に触るるいぬふぐり
う 浮うき氷こおりつつきて遊びをりにけり
せ 背なごしに白梅乱れ散りにけり
な 菜の花の固つぼみき蕾つぼみに乗る雨う滴てき
に 肉を切る手のあやふやに春の雪
を 折りとりし菜の花の茎くきみづみづし
す 水筒に桜湯詰めて貰ひけり
る 流る浪ろうとは余よ寒かんの浜に着きし壕びん
に 鈍にび色いろの霧きりを起こして春の雨
も 門前に踏ふみつぶされし落おち椿つばき

し 鹿鳴いて余寒厳しうなりにけり
ん はとうに書けるといって入学子
け 蹴り上げて春泥飛ばす馬の脚
ん の文字を練習する子うららせし
の 野遊や薄桃の布かけし籠
い 幾たびと来し丘に風光りけり
の 海苔搔女うなづくのみの赤ら顔
ち 乳吸へる児の唇熱き春の宵
が がくがくと残雪を踏みしめにけり

蟋蟀のひねりを入れて飛びにけり KOKIA

こおろぎのひねりをいれてとびにけり

木瓜ぼけの実の枝に食ひ込みをりにけり

嬰兒みどりごのまぎれ込みたる運動会

朝寒あさざむや振り子時計に遅れなし

秋うらら窓に貼りつく嬰やの顔

KOKIAさんに小動物を詠ませたら六花の中で右に出る者がいない。彼女は一時的に俳句が解らなくなりかけていたが、見事に軌道修正して好調が続いている。現在一日五句を自らに課して実行しているが、それが好調の原因ではなく、将来の為の一日五句なのである。この句、蟋蟀や飛蝗の飛び方を実によく観察している。いつも見ていて見えなかった物を鋭く捉えた。

見下ろせる木々美しく冬に入る 筒井八重子

みおろせるきぎょうつくしくふゆにいる

地平線赤く染め上げ冬日の出

見舞ひしをかひなく思ふ年の暮

柿紅葉最後の散りていよよ冷ゆ

三日月に星添ひ光る寒夜かな

一見地味な作品だが、このような句も大切にしたい。「冬に入る」即ち立冬は十一月。つまり紅葉の色極まる秋の終わりでもある、それを紅葉が美しいなどどくどくと言わず、季語「冬に入る」に全てを託したことにより、飽きの来ない上品な作品になった。私がいつも言う邪心のない作品なのだ。筒井さんはこの一年で急に成長した。特に大景を詠むのが上手くなった。

雛の間に光の束のありにけり

田尻勝子

ひなのまにひかりのたばのありにけり

錠剤のフィルム折り取り大晦日

股座またぐらに小さき沍いて足差し込ま

春の雪獅子茫然ぼうぜんとゐるサファリ

咳きこんで火柱となり天に着く

ついに来た！という句。この感覚は何をしても真似られるものではない。それを田尻さんが生み出すまで私も副主宰もジツと待つのである。雛の間の襖を少し開けたら中にまばゆいばかりに光の束が噴出してゐる。その光景はかぐや姫のシーンや、洋画「未知との遭遇」のシーンを瞬時に思い起こさせるのである。雛の間に光の束があるだけと言った簡潔明瞭さが句の強さなのだ。

枯芙蓉
かれふよう

木内美保子

牡蠣殻かきからに汐しおの香残る夜の厨くりや
打返す度に青増す冬の潮
からからと風が奏でる枯芙蓉かれふよう
小六ころくが月木の香の匂ふ街の椅子
命終みょうじゆうの彩煌いろきらめきて銀杏いちよう舞ふ

燭蒼し
しよくあお

笹村政子

襟巻えりまきの光る目玉をずらしけり
少年せうねんのわかつ聖夜の燭蒼し
枯菊かれぎくを焚たきし軍手を脱ぎにけり
除夜の鐘母のまどろみとどまらず
海峡の雲を貫く初日はつひざ射

六花集

六甲選

田尻勝子

錠剤のフィルム折り取り大晦日
股座に小さき沍て足差し込ま
雛の間に光の束のありにけり
春の雪獅子茫然とあるサファリ
咳きこんで火柱となり天に着く

菊谷 潔

木枯の梢研ぎだし始めけり
臘梅の一枝席をあたたむる
かけて行く落葉は何に益せむと
花の香も虫の音もなく行く秋ぞ
音もなく落葉ふみゆく時雨かな